



【住 所】千葉県旭市イの1326番地

【病 院 長】吉田 象二 先生

【病 床 数】956床(一般730床、精神220床、感染6床)

【スタッフ】医師(常勤)12名、内視鏡スタッフ14名(内視鏡技師 3名)

【内視鏡検査・治療総数】(平成19年度) 上部内視鏡検査数 13,500例、下部内視鏡検査数 4,760例、ERCP 870例、EUS 284例、内視鏡的乳頭切開術 203件、EPBD 21例、内視鏡的止血術 上部 222件・下部 80件、ダブルバルーン小腸内視鏡検査 19例、経鼻内視鏡検査 185件

【内視鏡関連機器】上部用26本、下部用 17本、十二指腸用 5本、EUS用 2本、気管支用13本

## 徹底した感染管理とスタッフの高い技術が 増加する内視鏡診療を支える

### 人口100万人の医療圏の中核病院として 年間約20,000例の内視鏡検査を実施

旭中央病院は千葉県東部および茨城県南東部の人口約100万人を医療圏とする、東総地区最大級の中核病院です。この地区唯一の救命救急センターを有し、24時間体制で年間約6万人の救急患者を受け入れ、重症患者のドクターヘリ搬送にも対応しています。

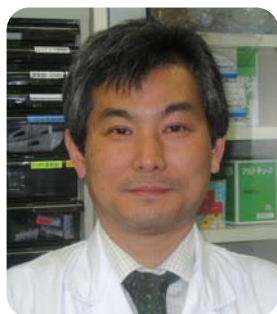
診療圏が広く救急患者も多いことから、内視鏡検査数も地域最多を誇り、消化器内科では上部・下部合わせて1日あたり約80~100件の検査を実施しています。救急患者に対する緊急内視鏡にも積極的に取り組んでおり、夜間・休日も3名の消化器当番医が控え、腹部救急疾患に対し365日24時間体制で診療にあたっているそうです。同科では全ての内視鏡医が上部・下部・胆膵の検査と治療を行えるため、緊急時にも必要な処置をオンデマンドで提供できるなど、スキルの標準化が図られています。

同科ではここ10年で内視鏡検査が約1.5倍、ERCPが約3倍と症例数の増加が顕著ですが、それに応じた人員の増加は叶えられていないため限られた人員で多くの症例に対応する必要があります。そのため、医師は基本的な内視鏡検査と治療をオールマイティに実施できるスキルを備え、また咽頭麻酔

はキシロカインスプレーのみとして手技時間を短縮するなど、可能な限り手技の効率化を図っているそうです。消化器内科部長の志村謙次先生は、「検査や治療を効率化することで得られた時間は、患者様の問診をじっくり行うことに充てています。特に服用薬の確認などは安全性を確保する上で重要です。また、下部内視鏡検査においては、前処置によるイレウスなどの合併症による急変のリスクがあるため、効率化よりも安全性を重視し全例院内で行っています」とお話しになりました。

### 最新の内視鏡機器と高度な治療技術で あらゆる診療に幅広く対応

同院は地域の第三次医療を担う最終病院であるため、全ての診療に幅広く対応し、最先端の検査や治療を地域に提供することが求められています。このニーズに応えるため、同科では拡大内視鏡やIDUS、ダブルバルーン小腸内視鏡などの最新機器を備え、またESDや隣仮性嚢胞に対する治療目的のFNAなど、高度な内視鏡治療も実践しています。志村先生は、「患者様にとって最善の医療を提供するため、内視鏡医を研修目的で大学病院などに派遣し、医師のスキルアップと最新の内視鏡手技の取得に努めています。また学会参加や学会での研究発表を奨励し、常に最新の情報を取得し日々の診療に活かすよう心がけています」とご説明になりました。



消化器内科 部長  
志村 謙次 先生

## ● 感染対策へのスタッフの高い意識が 内視鏡の履歴管理をいち早く実現

同科では安全対策にも積極的に取り組んでおり、中でも最も力を入れているのが感染対策です。スコープの洗浄・消毒は日本消化器内視鏡学会のガイドラインを遵守して患者間の全例消毒を行い、生検鉗子やガイドワイヤー、穿刺針などの内視鏡処置具については完全ディスポーザブル化を実現しています。リユース製品を再使用する場合は、メーカーが推奨する再生方法に従って完全な洗浄消毒を実施しています。内視鏡技師の須貝正男さんは、「2007年2月から、内視

鏡の洗浄消毒の履歴管理を実施しています。現在当院では放射線画像等を含めた診断画像や会計情報、病理オーダーなど、患者様の情報を電子カルテで一元管理していますが、そこに症例で使用した内視鏡の番号、洗浄消毒実施者などの情報も入力して管理できるようにしました」と、同科が早くから積極的に感染管理を強化してきたことをご説明いただきました。



内視鏡技師  
須貝正男さん



消化器内科のみなさん